化膿性，肝膿瘍が最も考えられた．又，本症例では，占拠部位が横隔膜直下でないこと，脂肪肝もなく，単純CT で明瞭な低吸収域があることより，US で病変が検出できなかった理由として，病変がすでに治癒後期に入り，そのため，肉芽組織による瘢痕化していたことが推測された．

3. 画像上著明な脂肪浸潤が疑われたアルコール性肝障害の2死亡例

山田 慎二・打越 康郎
岡田 和彦・角谷 宏
杉田 健一・味方 正俊
渡辺 裕・大貫 啓三
（立川綜合病院内科）
立川 信三 （表町病院内科）

比較的急速に進行し，画像上高度な脂肪沈着が疑われたアルコール性の肝不全の2死亡例を報告した．1例は大量の飲酒歴は約10年，1例は約1年であった．前者は56年には脂肪肝はなく，61年6月の入院時は，大量の腹水と CT 上著明な脂肪沈着が疑われた．入院後，黄疸は増強し8月永眠された．剖検では肝に著明な脂肪沈着が認められ，肝組織像では，高度な脂肪沈着を伴ったPPCF with LD の所見であった．後者は肝性脳症と黄疸で6月29日入院．現病歴から重症アルコール性肝障害と考えられた．入院3日後に永眠された．CT にて著明な肝の脂肪沈着が疑われた．両者はいづれもアルコール性肝不全例と考えられた．

4. 腹腔鏡で診断しえた腹膜偽粘液腫の1例

高田 俊範・加藤 俊幸
佐藤 竹敏・斉藤 征史
丹羽 正之・小越 和栄
（県立ガンセンター新潟病院内科）

症例は71歳女性．主訴は腹部膨満感．昭和46年に胃癌にて手術を受けている．昭和57年胸膜腫瘍と少量の腹水を認め，60年11月より腹部膨満出現し61年3月3日入院した．入院時著明な腹部膨隆・波動・下腿浮腫を認めた．検査成績では，中等度貧血・凝固能低下・CEA 19.7ng/ml の高値を認めた．腹部 CT で多量の腹水を思わせる low density area が腹腔内に広がっていたが，数回の腹腔穿刺でも腹水は得られず少量のゼリー状物質が得られた．以上より腹膜偽粘液腫を疑い3月17日腹腔鏡検査を行ったところ，緑色の寒天様物質が腹腔内に充満しており，腹壁には数個の白色隆起を認めた．寒天様物質の CEA は 500ng/ml 以上であった．3月28日手術を行い左卵巣原発の高分化腺癌が認められた．

5. トロトラスト症による肝腫瘍の2剖検例

波田野 徹・野本 実
市田 文弘
（新潟大学第三内科）

症例1　72才男性　昭和15年戦争中，左腕貫通銃創を受け，血管造影でトロトラスト使用後昭和54年近医にて腹部X線上肝脾に異常影指摘され，本学放射線科にてトロトラスト症の診断受け，昭和60年10月右側腹部痛出現し精査目的にて当科入院．ALP 等胆道系酵素上昇，CT，腹部エコー，腹部血管造影にて肝内多発性腫瘤及び胆嚢腫大を認め，胆管癌，急性胆嚢炎と診断．昭和61年8月肝不全にて死亡され剖検にて多発性，黄白色調の塊状腫瘤を認め，癌膵を伴い，門脈内腫瘍栓塞，胆嚢管の閉塞を認めた．組織学的にトロトラスト沈着，肝門部胆管癌，肝細胞癌を認めた．

症例2　62才男性　同様に戦争中トロトラスト注入後40年経過にて，肝腫瘍が出現．剖検にて，トロトラスト沈着及び肝細胞癌が認められた．

6. PTCD 後，肝被膜下に巨大な血腫を形成した1例

山田 慎二・打越 康郎
岡田 和彦・角谷 宏
杉田 健一・味方 正俊
渡辺 裕・大貫 啓三
（立川綜合病院内科）
相良 理枝・西巻 正
大溪 秀夫
（同 外科）

症例，69才，男．40°C の発熱を主症状として来院．入院時，炎症所見に加えて胆道系酵素の著明な上昇がみとめられた．画像上，肝膿瘍と肝内胆管の拡張がみとめられた．抗生物質投与で解熱したが，原疾患として十二指腸乳頭部癌が疑われ，ERCP にて胆管に挿管できなかったため，PTC 施行．その翌日より熱発したため PTCD 施行．画像上，乳頭部癌と思われた．その翌日ショック状態となり CT にて肝被膜下に巨大な血腫の形成が認められた．PTCD に合併する出血の頻度は穿刺回数と大きな関連をもつとされるが，穿刺回数は1回であったにも関わらず巨大な血腫をきたした稀な症例と考え報告した．

7. CT による肝容積計測と各種肝機能検査との相関に関する検討

杉村 一仁・渡辺 俊明
尾崎 俊彦・市田 文弘
（新潟大学第三内科）

当科入院症例59例を対象とし，CT よりマッププログラム及びプラニメーターを用い面積を求め，その総和にスライス幅を乗じて求めた肝容積と各種肝機能検査との

対比検討を行なった結果は次のような結論を得た．

1. CT による肝容積計測では，対照群と各種肝疾患群の間に差はみとめられなかったが，肝硬変を成因別に分類すると，B型肝硬変では対照群に比し，肝容積の有意な縮小を認めた．

2. 肝硬変群のなかでは，アルコール性肝硬変の容積はB型肝硬変に比して，有意に増大していた．

3. B型・非B型肝硬変群において肝容積と Ch-E, T.Bil, ICGR15, HPT との間に有意な相関がみられた．

4. 非代償性肝硬変は代償性肝硬変に比して，肝容積の有意な縮小を認めた．

8. CT による脾容積測定と US による spleen index との相関に関する検討

鰍沢　夏美・成澤林太郎
尾崎　俊彦・市田　文弘（新潟大学第三内科）

当科入院症例59例を対象として，CT による脾容積測定を，プラニメーターとマッププログラムを用い，各スライス面の面積を計測し，スライス幅を乗じて測定した．また spleen index は右側臥位で左肋間を探触子で走査し，脾の最大面積が得られた像より長径と短径を測定し，それらを乗じた値とした．以上の様にして求められた結果を検討したところ，① CT による脾容積と US による spleen index との間に正の相関がみられた（$r=0.719$）．② 慢性肝疾患において肝病変の進展にともない，US・CT 画像上，脾容積の増大がみとめられた．③ 触診可能な脾の平均容積は $583\pm194cm^3$ であり，腹腔鏡下で照診可能な平均容積は $316\pm118cm^3$ であった．

9. 閉塞性胆管炎による多臓器不全21症例の検討

清水　武昭・篠川　　主（信楽園病院外科）
長谷川　滋・新国　恵也
佐藤　　攻・土屋　嘉昭（新潟大学第一外科）
吉田　奎介

従来，我々は胆管炎を，軽症胆管炎と，ショック，腎不全などの臓器不全を伴う重症胆管炎とに分け，さらに胆管炎であるが故に肝臓に対する障害度より，減黄率b値を悪化させる肝障害型胆管炎と減黄率b値を悪化させない肝素通り型胆管炎（腎障害型胆管炎）とに分類し検討を重ねてきた．閉塞性胆管炎より多臓器不全，いわゆる MOF となった症例のうち減黄率b値が判定可能であった症例が21例あり検討したので報告する．

70才台が11例で男性は21例中16例でした．基礎疾患では，総胆管結石症13例，肝内結石症2例，胆管癌2例，膵癌1例，胃癌1例でした．21例の減黄率b値は，1群が11例と過半数でした．胆管炎より MOF となったのに，肝障害は軽度でした．1群では4群に比し病悩期間は短く，乏尿で，血清クレアチニン濃度は高く，リンパ球，血小板はすくなく肝と腎とに対する反応が正反対で発症機転が異なると考えられた．

10. 同一肝細胞癌症例における原発巣および皮膚転移巣の細胞培養の試み

前田　裕伸・荒木　　進
相川　啓子・曽我　憲二
柴崎　浩一（日本歯科大学新潟歯学部内科）
本間　　明（済生会新潟総合病院内科）
豊島　宗厚（南部郷総合病院内科）
小方　則夫・芦田　雅彦
浜田　忠弥（新潟大学ウイルス学教室）
佐藤　　尚・広瀬　慎一
上村　朝輝・市田　文弘（新潟大学第三内科）

56才男性で AFP 55ng/ml を示し肝細胞癌と診断された症例の原発・皮膚転移両巣より安定した培養細胞株を得た．原発巣株は核小体を含むやや明調で類円形の核と好酸性の胞体をもち敷石状に配列した．転移巣株では染色性は似ているが紡錘形でガラス壁への接着性が高く，不規則に肉腫様増殖を示し，その培養液は粘調性を示した．原発巣株はヌードマウスに移植可能で単クローン性の高い細胞となった．培養液中の AFP 活性は原発・転移巣両株で陰性で，転移巣株でのみ CEA が検出され，かつ Hyaluronic acid, Fibronectin の産生も上昇していた．しかし Ferritin, β_2-microglobulin, α_1-antitrypsin, Sialic acid, Hyaluronidase 活性には差がなかった．原発巣株につき Southern dlot hybridization を試みたが，HBV・DNA は free, integration いずれも検出されなかった．なお本症例の HLA は A 1, A 24, BW 52, DR 2 が陽性を示した．今後さらに両株細胞間における表現形質や各種感受性の相違につき検討を要すると考えられる．

11. 肝疾患における IgA 測定の意義

太田　宏信・佐藤　　尚
荒川　謙二・本田　一典
山舗　昌由・吉田　俊明（新潟大学第三内科）
市田　文弘
石原　　清（新潟大学医療技術短期大学部）

肝疾患における血清 IgA, 血清分泌型 IgA, 末梢血リ